

「表す力、現れる力」

先日の九州大谷短期大学、表現学科演劇放送フィールド教授、日下部 信先生のコメントを読ませていただきました。私の考えを織り込みながら紹介させていただきます。

『演劇には、「シアター」と「ドラマ」という考え方が存在します。「シアター」は観客に見せることを前提とした表現行為。「ドラマ」は、「こころとからだ」の発達・成長に重さを置いた表現行為です。そして、子どもたちに必要なのは「ドラマ」です。』

例えば、今月行われる本園の本学発表会はまさにこの理念にもとづき演出しています。保護者に見せるため、よろこばせる内容は極力排除しています。いわゆる「こどもファーストです。」

一般に幼稚園、保育園は過剰に園児たちの統率を取り、きれいに見せようとする。この意識の対象は明らかに観客（保護者）ですので「シアター」になってしまいます。

本園のように「ドラマ」の視点であれば、お子様たちの心と体の状態を最優先に考えます。その意識があれば、先生が声を荒げて子どもたちの表現への興味・楽しさを奪うことはありません。

また、保護者がショーアップされた発表会を望むのも「シアター」となり、子どもにウソの演技を要求することになります。見栄えがいいことが正解ではありません。そもそも子どもにとって、舞台上のまぶしい照明や大きな音は強いストレスです。お子様に寄り添う園ほど、光や音の刺激を抑えて実施されているはずです。保護者のビデオ撮影には不親切な発表会になりますが、「何が本当に子どもの今に必要なか」を考えるならば、それは録画することではなく、目の前のお子様たちが自発的に表現する姿と一緒に心動かすことではないでしょうか。お子様たちが、音やことば、歌やリズムを表し、そして現れ出る自己表現の楽しさ面白さを実感し、新しい心が生まれたならその発表会は成功です。

子ども自身が好奇心と想像力を発動する「ドラマ」を忘れないでほしいのです。先生や保護者はステージの上に「バラバラの輝き、デコボコの美しさ」を見出してほしいと思います。空に輝く同じに見える星がひとつとして同じ星ではないように、地上に咲く花がひとつとして同じではないように。お子様も皆、同じではありません。

今月の音楽発表会は当日の一瞬のお子様の輝きを「ドラマ」としてご覧いただき、成長の姿を保護者の皆様とともによろこんでいただきたいと願っています。